熱戦のエピローグ　月下の孤高狼編③

オオスカシバ

例の遺族とは、成人式二週間前の日曜日に会うことに決まった。月乃だけでなく、中学生の五人にも会いたいとのことから、メンバー全員で行くことになった。彼らの家は木ノ道中から三キロほど南に進んだ浜塚市中心部にあるとのこと。そのため珠美と蒼葉は自転車で向かい、月乃は桃花と涼花、綾音を乗せて車で向かった。目的地に近づくまでは市街地へ繋がる県道を南下した。その途中で左手に見えてきたのは、自殺した選手が通っていた中学校。コンクリート打ち放しの校舎は市街地の建物群にカムフラージュしていて、土地勘のない人は学校だと思わないだろう。そこが中学校だと教えてくれるのは壁面に飾られた部活の横断幕だけだ。月乃が中学生だった頃には卓球部のものがよく飾られていたが、今は違う。代わりに覇権を握っているのは、サッカー部や吹奏楽部だ。換気のために窓を開けるとカッコウの囀りに混ざって、金管楽器の音色が飛び込んできた。桃花たちは「うちらの学校より上手いや」と笑いあっている。相変わらず部活に熱心な学校のようだ。

市役所や市民会館が並ぶ中心地を抜けると、台地になっている住宅街に突入した。家々の切れ目からは背の低い山々と、中腹にある遊園地の観覧車が見えた。選手もこの美しい景色を見ながら育ってきたのだろう。

しばらく路地を進むと、スマホから案内終了の音声が流れた。そこには庭木が念入りに剪定され壁も温かみのある色調の戸建てがあった。表札には「吉村」と書かれている。間違いなくあの時自分が負かした選手の苗字だ。駐車場は一台分空いていて、事前にそこに停めるよう指示されていた。うっかり壁にぶつけないように気を付けながらバック駐車を成功させた。後部座席の二人も翌日痛めそうなほど首を曲げて曲げて後方の安全確認を手伝ってくれた。

エンジンを止めた車内でスマホを見ると、自転車の二人から「あと数分で着きます」との着信があった。住宅街に入ってから道に迷わないか心配だったので、少し待って様子を見ることにした。しかし相手は幼児ではなく中学生。まもなくシルバーの自転車にまたがって颯爽と現れた。涼しい表情でペダルを踏んでいたので安心した。

六人は手土産の入った紙袋を持って、インターフォンを鳴らした。反応があるまでの間、冷たい空気が皆の首筋を切りつけていた。しばらくするとスピーカーから声がした。

「どちら様でしょうか？」

応じたのは選手の母親と思しき女性だった。月乃は自分の名前を伝えた。すると、壁の向こうから軽快な足音が聞こえてきて、扉の鍵が開けられた。出てきたのはさっきの声の主だった。少しやつれてはいたものの肌や服

装には品があり、知らない人からしたら娘を亡くした過去を持つ人には見えないだろう。
「どうぞお上がりください」
緊張に唾を飲みながら、玄関に一歩踏み入った。気のせいか冷たい何かに体を触れられた感じがした。選手に恨まれているのではないかと不安になる。ひょっとしたら桃花にも異変が起きるかもしれない。恐る恐る振り返ってみたが、彼女たちは何食わぬ顔で女性に挨拶をしていた。その様子に安心した月乃は、両手で手土産を渡した。
「こちらへどうぞ」
案内されたのは和室。真ん中に大きなテーブルがあり、客人の人数分座布団が敷かれていた。
「さ、座布団のところに座って。足がしびれたら大変だから、無理に正座しなくて大丈夫よ」
月乃たちが腰を下ろしたのを見届けると「ちょっと待っててね」とだけ言い残し、キッチンへ向かった。かすかに飲み物を注ぐ音が聞こえてきた。
部屋を見渡すと小さな箪笥の上にいくつもの家族写真が飾られている。父親と母親と選手、そして彼女の兄と思わしき三人の男の子も写っていた。三歳くらいに見える選手はちょうど真ん中に映っていて、まるで厳重に守られている宝石である。その時、廊下の方で一つ大きなくしゃみが起こると、女性とはまた違った足音が聞こえてきた。開けっ放しのふすまの陰から大きな人間が顔を出した。
「ああ、お客さんですね。はじめまして」
テレビでは「お父さん」と呼ばれそうな年齢層の男性が入って来た。すり足で畳の和室に入ってくると、ブルーギルズの向かいに腰を下ろした。彼女たちに普段使っている座布団を貸してしまったせいか、直に正座をしていた。
「座布団、私大丈夫ですよ。使ってください」
月乃は流石に申し訳なく思えてきて、すっと立ち上がって座布団を掴んだ。すると父親である男性は、おかしげに大口開けて歯を見せた。そして、
「構わん構わん。若い者に苦労はかけたくない。どうぞ君たちが使ってくれたまえ」
健康そうな太ももをパンパンと叩いて見せた。彼も血色豊かな顔をしていて、とても悲しい過去を持つ父親には見えなかった。そこへ、お盆を持った母親が戻って来た。
「寒かったでしょう。お茶でも飲んでいってください」
ブルーギルズの六人に順に湯呑を渡した。そこにはおいしそうな緑茶が注がれていて、ほんのり茶葉の香りがした。
「さて、母さんも来たことだし自己紹介するか」
両親の名前は吉村進さんと、照美さんとのこと。そし

て、月乃たちも各々簡単に自己紹介を済ませた。
「ほお、妹さんたちもみんな卓球部で中学二年生なのか。ならもうすぐ六学年下の子たちにも歳を抜かされてしまうな」
「ええ、だって優陽が二十歳になったんですもの。時の流れは早いわ」
ここでようやく娘の名前が出てきた。
「優陽は男ばかりの我が家に来てくれた天使だった」
進さんは、箪笥の上の写真に目をやった。
「皆を温めるように優しく、でも灼熱の太陽のように力強く生きる子になってほしくて優陽って名付けたの」
優陽……月乃は遠い記憶をたどった。強豪校の選手なだけあって、大会で見かけるたびに意識していた一人だった。所属する中学の選手の中でもひと際朗らかで、雲の隙間から顔を出す太陽のごとく眩しかった。決して名前負けなどしていなかった。その証に、最後の大会で自分と向かい合った時、彼女の顔には宇宙で燃え盛る太陽のような気迫が感じられた。生半可な思いで戦いに挑んでいたはずがない。彼女はきっと必死だった。
「写真、見てもいいですか？」
好奇心旺盛な珠美と綾音は、照美さんに尋ねた。
「もちろん。もっと近くに行って見ていいよ」
二人は目を輝かせて箪笥の方へ向かった。他のメンバーも、それに続いた。
「あの、私も見ていいですか？」
月乃も恐る恐る聞いた。
「いいのよ。優陽も、あなたが自分のことを想ってくれているって知ったら喜ぶと思うわ。会えなくても時々思い出してあげることが一番の供養なのよ」
「月乃さんも優陽のことで責任感じちゃってると思うけど、私も母さんも、きっとあの子だってあなたは悪くないと思ってるはずだ。だから安心してほしい」
進さんも彼女を後押しした。それに応えるように月乃も箪笥へ向かうと、手を合わせてから写真の一つ一つを眺めた。
「あ！」
一枚の写真に目が留まって、思わず声を上げた。優陽が試合をしている様子が納められていた。
「これはいつ撮った写真ですか？」
振り返って、二人に訊ねた。
「これは確か、二年生の新人戦だったかな？」
進さんは照美さんに確認を取る素振りを見せた。
「そうだったわ。確かこの時、いいところまで勝ち進んだけど、同じような強豪校の選手と当たって負けちゃったわね。その写真は一回戦で撮ったものよ」
おかっぱ頭の優陽の顔には、自分が戦った時よりも少しだけあどけなさが見受けられた。年齢より二、三歳は幼く見える小柄な体に、若草色のユニフォームがよく似

合っている。
「一回戦は相手がそんなに強くなくて、大分余裕そうだったな」
進さんは懐かしそうに語っていた。
「私たちが試合を見に来てくれるのを喜んでいたわ。でも、三年生になった頃から急にそれを拒むようになったの。今思えばそれがSOSのサインだったのかもしれないのに、気づくことができなかった」
照美さんは、途端に俯いて涙声を上げた。細い背中は小刻みに震えていた。
「あとになって遺書が見つかったんだが、どうもそのころからスランプだったみたいで団体戦から外されていたらしい。私たちが試合を見に来ると、それがばれてしまう。弱いところを見せたくない。娘なりにプライドがあったんあだろうな」
確かに、月乃は彼女に勝ったとはいえギリギリだった。もし本調子だったら、普通に負けていてもおかしくなかった。彼女の顔に真剣さがあったのも、ただ気合が入っていただけではなく切羽詰まっていたからなのかもしれない。そこまで見抜けるほど当時の自分は優しくなかった。牙を剥く狼には分かるはずがなかった。
「スランプだったから敗北は覚悟していたようだ。不調なのは顧問だって分かっていたはず。でも、強豪ではない中学に負けたために、やる気が足りないとか、あたかも娘の姿勢に非があるかのように責め立てた。それで、最後の最後で自分の三年間の努力が否定されてしまったように感じて、絶望してしまったみたいだ」
そう言い終えると、進さんは歯を食いしばった。
「私たちは娘の悩みに気づけず、見殺しにした無能な親です。そのせいで月乃さんのような無関係の人まで苦しめてしまった。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです」
夫婦は、深々と頭を下げた。
「そんな。娘さんも、お二人も悪くなんかないです。えん罪を被ることになったのは、まぎれもなく私の日ごろの行いのせいなのですから」
「でも、あなたが困っていることには変わりないじゃない。娘を救えなかった私たちが言うのもおかしいけど、これ以上苦しい思いをする部員を増やしたくないのよ。優陽のためにもね」
照美さんの目には涙がにじんでいた。進さんが背中をさすって慰めた。
「そろそろ本題に移らないとな」
妻が落ち着いたのを見届けると、彼は一つ咳払いをした。いったん立ち上がると庭木を窓越しに眺めてから腰を下ろした。
「そちらの珠美さんから少し話を聞いている。何でもうちの娘のことで濡れ衣を着せられてたとのことだな」
彼が珠美のことを見たので彼女は座ったまま会釈をし

た。
「さっきも言ったけど、あなたは絶対に優陽を殺した犯人なんかじゃない。悪いのは紛れもなく顧問です。娘に代わって宣言しておくわ」
照美さんが念を押した。そして、遺影に語り掛ける。
「そうよね。優陽」
月乃の脳裏に優陽の顧問の姿が甦った。確かにあの時、彼は息継ぎも忘れる勢いで彼女を罵倒していた。精神を痛めつけられていた彼女を見てまったく心を痛めなかった自分が憎たらしくて仕方がなかった。月乃は唇を噛んだ。
「母さんの言う通りだ。その代わり君には別の課題があるな」
あぐらをかいた腿に両手をついた。
「自覚があるのならとにかく謝罪して誠意を見せることだ。誰かさんのように、五年経っても指導の過ちを認めない愚か者もいる。でも君は違うだろ？　本気で反省しようと思っているじゃないか。いいことだ。それを態度で示しなさい。きっと思いは伝わるはずだ」
その言葉を聞いていた桃花は、心の中で首を傾げた。力を貸すと言っていたのに、これでは結局月乃一人で戦えと突き放されているように感じた。
「でも、お姉ちゃんはまわりがみんな敵なんですよ！」
我慢できずに口を挟んでしまった。
「うん。敵が多いのは事実だ。そいつら全員を一度に振り向かせるなんて無理に決まってる。だから、まずは仲間のうち誰か一人でいいから会って直接謝罪してみようか。彼女が味方についてくれれば心強いと思わないか？」
「一人でいいんですね……」
「ああ。小さなことから少しずつ始めていけばいい」
「大きな夢を叶えるためにはまず目の前にある小さな目標を潰していく。うちの子たちにも教えてきたことよ」
もちろん、部員に謝罪することも前々から考えてはいた。でも多くのメンバーは自分の導き方のせいで心を病み、不登校になってしまった者もいた。PTSDでも患っていたら、直接顔を合わせることは拷問に等しいといえる。だから踏み出せずにいた。
「ならば、頑張って副部長に話をしてみようと思います」
副部長は忍耐力のある子で、不満も言わず月乃の相手をしていた。ただ、自分のことをどう思っているのかは分からないままだ。一か八かの賭けに出るしかない。
「その意気だ！　精いっぱいやってこい。うちの自慢の娘に勝てたお前にならできるはずだ」
進さんが励ましてくれた。
「もし君が本気で謝ったのに向こうが許さず、更には誹謗中傷でもしてこようものなら話は別だ。そうなったら相手も加害者、すなわち月乃さんは被害者にもなる。そこまで戦いが長引いたら、私たちはもっと踏み込んだサ

ポートをすると約束しよう」
　進さんは血色の良い手を月乃の方へ伸ばした。彼女は戸惑いながらも同じように腕を伸ばす。すると、すかさず彼に手を握られた。力がこもっており、でも痛くない彼の握手の仕方に信頼感が芽生えた。できるだけ自分の力だけで頑張ってみよう。それでだめならいつでも彼のところへ行けばいい。今はもう安全基地があるのだ。
「勇気を出して戦ってきます！」
　握られた手に力を入れて言った。
「お姉ちゃん、本当に大丈夫？」
　桃花は怯える小動物の子供の目で月乃を見ていた。
「いいの。自分の道は自分で開く。サポートは一旦お預けだけど、話を聞いたことで心の持ちようが変わったから大収穫だよ」
　それでもなお桃花は不安げな表情を見せてた。
「桃花さん、お姉ちゃんはもう大人なんだからそんなに心配になくてもきっと上手くやり遂げると思うわ」
　照美さんも後押しした。月乃の横顔をこっそり見つめると、いつにも増して輝いて見えた。星の見えない夜に雲の隙間から地上を照らしてくれる満月のように。
　それから少しの間、月乃や中学生たちの学校生活に関する雑談を楽しみ、お茶とお菓子を味わった。あっという間に時計の針が進み日が傾いてきたころ、一行は吉村宅を後にした。
「月乃さんの健闘を祈るよ」
「誰かに甘えず頑張ることは素晴らしいわ。でも、辛くなったらいつでもここへ来てね。私たちは絶対にあなたの味方だって約束するから」
　夫婦は帰り際まで念を押してきた。他人の娘のことをここまで思ってくれる二人を見て、自分の幼少期を振り返っていた。自分の周りには天敵みたいな大人ばかりだった。でも、そんな人ばかりでもないということに気づかされた。なんだか怪我をしている所を人間に保護され、治療が終わってから野に放たれた野生動物のような気持ちになった。玄関を出ると木枯らしが月乃の長髪をなびかせた。染めたてのビスケットブラウンの毛は湖に移る月のように光を反射させた。

　綾音と涼花を車で送り届けると、今日も妹と二人きりの時間がやって来た。桃花は赤シートを使って英単語の復習をしていたが、きりのいいところまで終わると冊子を閉じて外を見た。少し酔っていた。そんな時は外を見るといいと親に教わったのを思い出す。何もない空を見ていると、だんだん気分が良くなってきたので一つ深呼吸をして正面に向き直った。こうすると思考が冴えてくる。ふと月乃が話していた副部長のことが気になった。

「お姉ちゃん、副部長に謝りに行くって言ってたけど会う手段ってあるの？　あの頃ははスマホ持ってなかったし連絡先だって分からないはずなのに」
　行方をくらますように生きてきた月乃が謝罪になんて行けるのか、桃花にはそこが引っかかっていた。
「お姉ちゃん、ひょっとして本当は何か知ってるの？　部員のその後を」
　桃花の言葉の槍が頭にでも貫通したかのように首に力を入れて顎を引くと、続けて目を細めた。
「桃花の言う通りだよ。私はどこまでも卑怯だった」
「卑怯って……今度は何をしたの？」
　エアコンで火照っていた頬が、しだいに青ざめていく。桃花は再び不安にさいなまれた。
「赤の他人のふりをして部員のSNSをのぞいてたの」
　月乃は高校生になってスマホを買ってもらった後、若者の間で普及しているSNSのアカウントを作っていた。高校生の流行についていく目的で入れていただけだった。でもある日、出来心で部員のフルネームを検索したら、本人のアカウントを発見してしまった。それが例の副部長のもの。部活を耐え抜いた彼女は実に華やかな高校生活を送っているようで、何枚もの写真を投稿していた。幸い彼女はアカウントに鍵をかけていなかった。そのため、相手に拒否されることなくフォローできる。ただ、練習中に牙を剥いた自分の場合そうはいかないかもしれないと不安だった。でも、彼女のその後は気になる。そこで月乃は正体を知られないように偽名のアカウントを追加し、そっちを使って彼女をフォローした。すると相手は何の疑いも持たずにフォローバックをしてきた。こうして一方的に繋がりを保っていたのだ。
「コソコソ相手のスパイしてる場合があったら、副部長だけにでも早いうちにDMくらい送れたのに。ずるいよね私って」
　桃花には目もくれずにハンドルに力を入れ、ただ前だけに神経を尖らせていた。妹にとても顔向けできなかった。
「副部長さん以外のアカウントは見つけられなかったの？」
　副部長のことが気になるなら当然他の部員のことだって興味を持っておかしくないはずだ。
「見つけられなかった。いや、そうじゃなくて、探せなかったんだよ。怖くて」
　バックミラーにつけられた狼の勝守りが揺れて、二人の方に裏面を向けた。豪勢な表面と違って、白い糸で神社の名前だけが寂しく刺繍されている。
「みんながせめて希望の高校に受かって、それなりに楽しい生活送ってくれてたならいい。でも、あの時から立ち直れずにずっと引きこもってたり治療に何年もかかる精神病に苦しんでいたら……だから現実から逃げてきた

んだよ」
　青信号の点滅する横断歩道を高校生が自転車で駆け抜けていく。桃花はぼんやりとお守りを眺めた。車はちょうど交差点を左折したところで、またせわしなく揺れ動いていた。椿の植え込みが続く通りを抜けると、家が近づいてきた。西の空は橙色の陣地が狭められ、重い藍色の軍勢がのしかかっている。桃花は眠気に重い目をこすった。

　無事に帰宅してからはそのまま夕食や風呂などを済ませた。塾のテストから解放され冬休みモードに片足踏み入れている桃花は、居間でコントの特番にくぎ付けだった。クッションに抱き着いたまま笑い転げる妹を尻目に、月乃は自室へと階段を上って行った。踊り場の窓は黒く塗りつぶされている。今日は新月だ。
　月乃はベッドの羽毛布団に潜り込むと、スマホを開いた。コツコツと画面にぶつかる指先はまだ冷たい。氷のような指で例の副部長のアカウントを表示させた。名前は「乃愛（のあ）」。プロフィールには地元の公立大学の名がある。彼女は月乃と同じくらい勉強ができる子で、浜塚市で最難関の女子高に進学していた。月乃も中一の頃からそこを目指していたが、途中で進路を変えざるを得なかった。成績が落ちたわけではない。親に反対されたわけでもない。理由は月乃だけが知っている。そう、部員と同じ進学先を選ぶのもまた罪だと思っていたから。彼女たちの前にのうのうと姿を現す資格はないし、変な噂が広まれば新しく出会った同級生からも恐れられ孤立するかもしれない。それを読んだ月乃は三年生の夏になると、同じようなレベルで隣の市にある公立校へ志望先を変えたのだった。鈴蔵中からその高校を受験する生徒は他に誰一人いない。だから噂を広められる心配もない。自分にとっても未来の仲間たちにとっても幸せな選択肢だと思っていた。
　晴れて月乃は志望校に合格した。しかし、本当に何も知らない高校の同級生と、醜い欲望を抑え込み向上心さえも捨てた月乃の交流は、自分自身に混乱をもたらした。自分の利益のために人を利用したり押しのけたりせず、誰にでも自然な笑顔をふりまく月乃を見た者たちはみな彼女のことを「純粋」だと評価し愛した。「純粋な人間」とは何か？　意味を調べた時、中学の頃の自分とは真逆な性質を指すことを知って頭を抱えた。狼と子犬、自分の心の中で飼われている獣はどちらなのか？　どっちが本当の自分で、どっちが偽物なのか？　子犬が偽りの姿なら、満月の光が差し込んだ途端に血の味を思い出して暴れ出すかもしれない。だけど自分が先天的に狼だった

としても、そんな事実は認めたくない。他者との戦いを避けた先には、アイデンティティの迷宮が広がっていた。

副部長のアカウントには今日も新しい写真が挙げられていた。どうやら大学のメンバーでテーマパークに行っていたのか、おそろいのコスチュームで飾ったぬいぐるみが並べられていた。変わらず良識があるようで、自分の顔が分かるものは載せていないようだ。

悴む指を震わせて DM のコマンドをタップした。そこには何一つやり取りされていないまっさらなページがあった。彼女に何と言って自分の正体を打ち明けるべきか悩む。ストレートに名乗れば通じなくもないが、証拠がない限りなりすましの不審者だと思われてフォローを外されてしまう可能性もある。失敗したら作戦が詰む。何か彼女と、そして女卓とのつながりを示せるものがあれば……ふと何かを思い出した。スマホを放り布団を飛び出す。そして机の引き出しから小さな箱を取り出した。修学旅行先で絵付け体験をした際に作った小物入れ。蓋にはラメ入りの塗料で南天の絵が描かれている。開けると中にはアクセサリーやキーホルダーがいくつも入っていた。手を入れればジャラジャラと鈴が笑う。やっと取り出したのは、華やかな黄色とオレンジで編まれたミサンガ。月乃がみんなで県大会を目指そうと決めた際、気の利いた副部長がメンバー全員に作って配ったものだった。

「世界に五本しかないミサンガ。これなら信じてもらえる」

ミサンガを机に置くと布団から急いでスマホを持ってきた。そして写真に収めた後で DM を打ち始めた。

「こんばんは。今まで隠れて投稿を見ていてごめんなさい。私は元女卓の部長、春山月乃です。その証拠に乃愛がプレゼントしてくれたミサンガの写真を送ります。今でも大事にとってあります」

ここで一度送信するとともに写真を添えた。すると、週末の夜だったせいか既読がすぐについた。しかし、相手は何かを迷っているのか、すぐに返事を送ってくることはなかった。

まずは様子見。一度アプリを閉じ、適当にネットニュースを見て時間を潰した。トップ記事には「速報」とついた見出しが数多く並んでいた。中身はとても物騒なもので「川沿いで子供のものとみられる骨発見。数年前の男児行方不明事件との関連性は？」となっていた。ついこの間の特集で両親の思いが報じられたばかり。彼らにとっては何がゴールなのか。どんな姿であっても息子が戻って来てほしいと願うのか。それとも骨は無関係で、一生会えなくてもどこかで背を伸ばしている希望を持ち続けられる方が幸せなのか。取り戻したいもののスケールは違えど、テレビの向こうの家族と自分が重なった。乃愛からの言葉をいくつも予想してみる。快く会って謝

罪を聞いてくれる乃愛。過去のことだし許すが金輪際関わるつもりはないと言う乃愛。そして、寝た子を起こしたことで怒り誹謗中傷を始める乃愛。自分はどうしたい、どうなりたいか目を閉じて考える。暗闇の中に進さんの言葉が甦る。大切なのは誠意を見せること。まずは自分が謝罪するのが優先で、その受け取り方や今後の付き合いは二の次、相手が決めることにすぎない。どんな未来が待っていようと決めた義務だけは果たすと心に決めた。

ほどなくしてアプリの着信音がした。焦らすように「新着メッセージがあります」とだけ書かれている。途端に早歩きになる鼓動。熱くなる頬。恐る恐る通知をタップした。あっという間にDMの画面へ飛ばされた。

「久しぶり！　月乃ちゃんだったなんてびっくり！　公開垢なんだし勝手に見られてたとか全然気にしてないからね」

一つ目に送られてきたメッセージは想像とは百八十度逆なものだった。どこかに頭でもぶつけて月乃にまつわる都合の悪い記憶を失ったのかと心配してしまう有様だ。

「ミサンガ、大切にしてくれてるなんてうれしいな。でも、急に敬語使って話しかけてくるなんて何かあったの？」

こんな調子の乃愛なら話を聞いてくれる気がする。ここまで来ると詰みの回避を確信した。少し温まってきた指でメッセージを打ち始める。

「実は、謝りたいことがあるんだ」

ここまで来たら勢いに任せて中身まで送ってしまいたかったが、本題は対面したときに触れるものだと思い踏みとどまった。

「謝りたいことねえ……どうせ部活のことでしょ？　だってさあ、月乃ちゃん卓球してるイメージしかないからな（笑）」

確かに彼女とは幼馴染だったわけでもクラスが被ったこともない。他にネタがないので必然的に部活に結びついてしまう。

「そうだ。SNSでそんなかたっ苦しいやりとりなんかしないで、二人でちょっとお出かけでもしない？　こうして繋がってるのも何かの縁だし、謝りたいことも含めていろいろおしゃべりしたいな」

忍耐強い性格故に、月乃に対するトラウマや警戒心を抱いている素振りを見せてこない。むしろ喜んでいるようにも思える。

「私ずっと実家にいてバイトもやってないからさ。月乃ちゃんの都合のいい日あったら教えてよ。こっちは基本暇だから」

幸い月乃も実家勢なので都合はつきやすい。お互い大学が冬休みに突入したころに会うことにした。月乃が運転をして小さなカフェに行くことになった。カーテンのわずかな隙間から隣家が庭木に設置しているネオンがま

たたいているのが見える。夜中でも昼間のように賑やかな窓辺とは真逆で、月乃の心は暗闇のままだった。相手が予想に反して何のためらいもなく自分を受け入れている様子が逆に末恐ろしかった。油断でもさせておいて隠し持ったナイフを突き立てられるような気がした。ミサンガをそっと引き出しに封印してから布団に潜り込んだ。時計の針は休むことなく微音を刻み続けていた。月乃の鼓動とリンクしていた。

約束の日は風のない穏やかな青空が広がっていた。バイト代を使って買ったお気に入りのセーターと、それにあったパンツを履き、月色のパワーストーンがあしらわれたブレスレットをはめた。メイクは温かみのある茶色を主軸に施す。コーデはばっちり決まった。

ヒーターは作動しているがまだ温まらない車内でハンドルを握り待ち合わせのコンビニに向かう。道中ちょうど昼を過ぎた頃だったので、午前練が終わった鈴蔵中生と何度もすれ違った。揃いも揃ってコバルトブルーのウインドブレーカに身を膨らませていた。

彼らを轢かないように注意深く左折してコンビニの駐車場に停めた。道が空いていたのと青信号が多かったせいで、集合時間よりだいぶ早く着いてしまった。暖房の効いた店内に誘われる。自分が車に戻った時には片手にミルクティーが握られていた。数日前に出たばかりの冬季限定品。これからお茶しに行くのにまったくコンビニに入ると余計な買い物をしてしまう。ミルクティーを三分の一ほど口にして、乃愛の到着を待った。相変わらずコバルトブルーの少年少女が通りを歩いていくが、桃花の姿はない。それもそのはず。彼女たちは今日も練習試合に行っていて、今回の依頼は実家が農家を営んでいる選手の手伝いをしてくるらしい。試合をする中学と選手の自宅は徒歩数分程度なので、月乃の送迎は不要。帰りも選手の父親がメンバーの実家周辺まで連れて行ってくれるとのこと。手製の干し柿の箱詰め作業をやると言っていた気がする。お土産の一つでも持ってきてくれるかなと淡い期待を抱いた。

中学生に気を取られている間に助手席側の窓が柔らかな音を立てた。慌てて振り向くと、そこにはいかにもゆるふわな出で立ちの女性がいた。ピンクのマフラー、溶かしたチョコレートな髪の毛、春を呼ぶ妖精とも見まがう乃愛がこちらを覗いていた。背後で桜の花びらを散らしたらさぞかし似合うことだろう。彼女は月乃に警戒する素振りも見せずドアを開けた。

「久しぶりー！　待たせちゃった？」

彼女の上半身が車内へ入り込んでくると同時にふわっと甘い香りがした。耳にはピンクのバラをあしらったイ

ヤリングが揺れている。
「……さっき来たばかりだよ」
緊張してしまい答えるまでに微妙な間ができてしまった。
「よかった」
乃愛は髪を耳にかけた。よく見ると爪にもピンクのネイルが施されている。中学の時は校則で華美な装飾が許されず、黒地にピンクの入ったエナメルバッグで我慢していた乃愛。抑圧されていた女子力を発揮した姿は圧巻だった。
「そのネイルかわいいね」
会話の中身はいたって普通でも月乃の肩には力が入っていた。
「ありがとう。これね、小さい頃から貯めてたお小遣いでおしゃれしちゃったんだ」
指の角度を少しずつ変えながら月乃に見せてきた。金色のラメが反射した光をあたりに振りまいている。バックミラーにつるされている勝守りの光沢がある刺繍とはまた違った輝き方をしている。陰か陽で言うなら紛れもなく後者だ。
「月乃ちゃんもこういうのに興味あるの？」
自分の爪もピンク色。でも、ラメも飾りもついていない。すなわち何もいじっていなかった。
「好きってわけでも、嫌いなわけでもないな」
出かけるときは化粧をするけど力を入れてるわけではない。髪も染めてはいるけど挑戦的な色にしているわけではない。
「でも、髪だって染めてるし服もかわいいじゃん。そうか、こだわりがないってことか」
自分が言いたかった言葉を引き出してくれた。
「なんか意外だな。卓球してた頃の月乃ちゃん見てると、いろんなことを考えてて自分の意見だってしっかり持ってたイメージだけど、今はわりと慎重派な感じ？」
車が動き出してからも二人の会話は続いていた。
「私、きっとあれだ……怖くなっちゃったんだよ。頑張りすぎて失敗するのが」
月乃の言葉に乃愛は首をかしげた。
車はカーブにさしかかる。対向車線にはみ出すのが怖くて車線の左側に車体が寄ったかと思えば、今度は電柱への衝突を気にしたのか右側に揺れた。
「ごめんね。会ったばかりなのに暗い話しちゃって。カフェに着いてからゆっくり話そうと思ってたことなのに」
乃愛は驚いた表情を見せた後、はっきりと首を横に振った。
「月乃ちゃんの好きなタイミングで話してくれればいいよ。その謝りたいこととかもさ。なんならカフェにいる時は楽しい話がしたいからさ。思ってることがあるなら今すぐにでも言っちゃってよ」

理想の再会。乃愛の言う通りゆっくりお茶でもしながら大学生活について語り合うのが普通だと思っていた。でも、彼女を始めとする部員の過去を汚しておきながら思い出話に花を咲かせる権利などないと諦めていた。なのに、目の前の部員はその「普通」を許す気満々である。彼女の言葉を信じてみることにした。

「覚えてるよね？　私が部長だったこと」

「もちろん。それで私は副部長だったね」

渋滞に差し掛かりブレーキを踏んだ。

「私の提案でさ、みんなで県大会に行くのを目標にしたじゃん」

列は一向に進む気配がなく、月乃の語りとは真逆なバラ色のテールランプが花畑を作っている。

「私はみんなにアドバイスとかして弱い子がいるなら少しでも上達するように導いていく役だったはずなのに、匙投げて自分だけ強くなって個人戦で県行こうとしてた」

列が動き出して控えめにアクセルを踏んだ。前の車はぐんぐんと月乃の車を引き離していく。

「別に県大会行かなかったら私が退学になるわけでもないのに。目標はあくまでも理想でしかないのに。思い通りにならない苛立ちをおさえられずにみんなを痛めつける様な練習して。自分が卓球をできるのは仲間がいてくれたからなのに、感謝するどころか利用したり否定するような真似して本当にごめんね」

乃愛は深いため息をつき、腿の上で拳を握った。

「月乃ちゃんは部長失格だな」

怒るわけでも嘲笑するわけでもなく、さっきまでと変わらぬ様子で言った。

「でもいいの。私は月乃ちゃんのこと許すよ。なんかさ、あの時の月乃ちゃんって高校生の頃の自分みたいでさ。私、どっぷり反抗期で親にひどいこと言ってばかりだった。娘失格。色違いのおそろいアイテムみたいだよね。私たちって」

運転中にも関わらず、危うく乃愛を直視してしまいそうになった。忍耐強く練習中に弱音を吐かなかった彼女が親に反抗したなんて到底信じがたかった。また、そもそもなぜ彼女が反抗期のことを引き合いにして許したのか意図が掴めなかった。理解に苦しみ言葉に詰まったところで会話が途切れてしまった。カフェまではもう少しなので、続きはそこで聞くことにした。

カフェは適度に混んでいた。しかし二人掛けの席は空いていてすぐに案内された。日当たりのいい窓辺の席で、赤と白のチェック柄のテーブルクロスで飾り付けられていた。

「キャラメルマキアートとチーズケーキを二つずつ」

乃愛が率先して注文してくれた。客の数のわりに早く届けられた。

「いただきまーす」

スマホで写真を撮ったあとで乃愛は目を輝かせながらケーキを頬張った。その無邪気な振る舞いのせいで中学のときよりも幼く感じられた。月乃も上品にフォークで切り分け一口頬張った。チーズケーキ特有の甘味と酸味が口いっぱいに広がる。
「そういえば、乃愛ちゃんに反抗期があったなんて意外だね」
飲み物も味わったところで話の続きを持ち掛けた。
「ああ。さっきの話、中途半端なところで終わっちゃったよね」
髪をかき上げながら月乃を見た。
「ほら。私って昔は大人しい方だったし、みんなからも絶対に不満とか悪口とか言わない優しい子って印象持たれてたでしょ」
ストローでキャラメルラテをかき混ぜながら言った。
「でも本当に何があっても気にしないタイプだったんじゃなくて我慢してるだけでさ。それが爆発した結果反抗期になっちゃったわけ」
吹っ切れたように笑っていた。
「自分が今まで育ててもらったことも忘れて、子どもが親に行ってはいけないことナンバーワンなあの台詞をぶちかましちゃってさ、お母さん泣かせちゃったんだ。怒りの矛先は違えど月乃ちゃんとやってること変わらいよね」

その時のことを思い出してしまったようで、彼女は月乃から目を反らしじっと窓の向こうを見ていた。
「後で冷静になって振り返った時なぜか月乃ちゃんのことを思い出したんだ。実は私、あの頃何も言わなかったけど月乃ちゃんの言動には不満を持ってた。だから反面教師にしてやるつもりだったのに、ほんと私は愚かだった」
さらに彼女は言葉を続ける。
「でも、その時分かったんだ。月乃ちゃんがああいう風になっちゃったのって単に貪欲とか意地汚かったんじゃなくて、今まで何度も辛い経験をしてきて心が限界を迎えちゃったからなのかもしれないって。自分が親に反抗したとき色々悩んでたのと同じでさ」
乃愛も乃愛で、高校生活を通して学んでいたことがあったようだ。
「月乃ちゃんが謝りたいなんて言ってきて安心したな。五年もあったら人は変われるって信じてるからさ」
月乃に向かってウインクを決めた。
「私も乃愛ちゃんに拒絶されたらどうしようって思ってたけど、こうして話聞いてもらえて安心したよ」
「ならよかった」
ほどよく冷めてきたキャラメルマキアートを口にした。
「でもさ、自分がどうしたいって考えを持てるところって月乃ちゃんのいいところだから、無理に自分を変えよ

うとする必要はないと思うんだ。挑戦してみたいこととかあるのにリスクばかり考えて我慢してたら、それこそまたどこかで爆発しちゃうかもしれないじゃん。人生つまんなーい！　って感じで」
「それもそうだね」
　緊張がほぐれて、おどけている彼女に笑顔を返すことができた。
「まあ、それは冗談として。さっきも言ったように人って五年あれば過去の行動が間違ってたことに気づくこともあると思う。でも、その逆もあるんじゃないかな。間違いだと思ったことが、テストでいうところの×じゃなくて△ぐらいだったのかもしれないってことにもさ」
「どういうこと？」
「月乃ちゃんが私たちにしたことは間違ってる。でも、三年全体で見ると、こっちが見習いたいなって思うくらい頑張ってたところだってたくさんあった。だから、二度と同じところで減点されないように反省するのと同時に、部分点もらえたところはこれからも自信を持って生かしていけばいいんじゃないかな」
　例えを用いたアドバイスに感銘を受けた。
「乃愛ちゃんかっこいいよ。学校の先生とか向いてそう！」
「へへ。実は私、自分や月乃みたいに葛藤してきた子供たちの力になりたいなって思っててカウンセラー目指してるんだ」
　それを聞いた月乃は静かなカフェの中で驚いてしまった。
「うそー！　実は私も教師目指してて大学も教育学部なんだよ」
　周りのお客さんが他人同士なのに見事なシンクロ技を決める。二人はすっかり注目の的になってしまった。
「ええ、部長失格だった月乃ちゃんが？　人生っておもしろーい」
　無遠慮に笑い始めツボってしまったのかしばらく会話不能な状態に陥った。キャラメルラテはまだわずかに残っているが今飲んだら確実にむせてしまうだろう。
「教育学部入って先生になるっていつから決めてたの？」
　ようやく正気にもどった乃愛の顔は熟れた桃のように赤みを帯びていた。
「高三の本格的な受験シーズンに入ってからなんだ。例によって何事にも無気力になってたから」
　キャラメルラテのカップからはまだわずかに湯気が湧いていた。
「でも、目標が見つかったんだ！」
　コップの中の泉が揺れた。
「妹の桃花がそのとき六年生で中学は私と同じ卓球部に入りたいって言いだしたの。部長失格だった姉だけど、妹のことはしっかりサポートできる先輩でありたいって

思ったの。でも、そのうちもっとたくさんの子供たちに健全に育ってほしいって思うようになってさ。それで教師になろうって考えたの」
　桃花に涼花……綾音に珠美にいじめっ子だった蒼葉まで。大切に守ってきた仲間の顔が浮かんだ。そして、桃花から聞かせてもらった話に出てきた選手たちも。みな様々な悩みを抱えながらも純粋な気持ちで部活に打ち込みエースと言える存在でありつづけていた。
「何だ。ちゃんと持ってるじゃん。自分の意見ってやつ」
　今度は吹き出すように短く笑った。
「世界にたった一つ。月乃ちゃんにしか持てない夢だと思う。すごい素敵だね！」
　乃愛が見せた笑顔の裏側には何も見えなかった。
「じゃあ私と約束してよ」
　突然持ち出された話に月乃は首を傾げた。
「何を？」
「あのね……」
「妹ちゃん今中学生だよね。卓球に関係あるなしに絶対に泣かせるようなことはしないでよね。もう私たち以外に被害者は出さないでよ」
「参ったなあ。妹中学生にもなって友達とケンカで泣いたくらいだからなあ……難題かもしれない」
　本気で考え込む月乃を見て乃愛は再び笑った。
「冗談冗談。だって私と月乃の妹ちゃん繋がってるわけじゃないし確かめようがないもん」
　それはそれとして月乃はあることが気がかりだった。
「そういえば……他の部員ってその後どうなったか知ってる？　みんなにも謝らなきゃなのに、連絡先も分からなくてさ」
　乃愛に許してもらったとはいえまだすべてが解決したわけではない。むしろ残された課題の方が数倍重い。夕方になって窓の外では強風が咆哮を放ったようで植木のオリーブが大きく撓った。
「月乃ちゃんやっぱり不安だよね。でも安心して」
　吹き荒れていた風はすぐに止んだ。
「私は中学の頃からスマホ持ってたからいろんなアカウントで繋がりがあるんだけど、みんなちゃんと高校行ってそれぞれの道に進んでるみたいだよ」
　案ずるより産むが安しという言葉はあるが、いっさい後遺症がないことに違和感を覚えた。本当は何か隠している事実があるのではないかと不安になった。
「本当にみんな元気なの？」
　しつこく質問をぶつけてしまった。
「そうみたい。精神的に病んだ時にはその原因を取り除くのがいいって言うのは本当みたい。あれからはもう月乃との関りが無くなったから回復に向かったんだと思う」
　自分の存在がトリガーなら成人式で再会することはまずいんじゃないかと考えた。

「でも、それだけじゃないよ！」
乃愛はもっと言いたいことがあったようだ。
「月乃ちゃんはもとから悪い子だったわけじゃないことはみんな分かってたし、私と同じように世の中にはいろんな事情を抱えている子がいて、時に発散の仕方を間違えてしまうこともあるって学んできたみたいなの。だからものの見方も大人になってて、もう月乃ちゃんのことをそんなに恨んだりとかしてないみたいだよ」
「でも、フラッシュバックとか侮れないよ……」
人の心は思うより繊細なもの。ここまできて勇気が持てずにいた。
「きっと大丈夫だって！　月乃ちゃんってさあ今日会って思ったけど見た目も中身ももうあの時とは別人じゃん。もはや狼じゃなくてハスキー、いや、豆柴の子犬みたい。ていうか今試合したらスマッシュがおでこに直撃しただけで気絶しそう」
それを聞いて、月乃の頬は桃色通り越して梅干し色に変わった。
「何それ子供っぽいってことー？」
飼い主に呼ばれて走って来た子犬が転んでしまい、笑いが起こる画が脳内再生された。
「実はみんなの間で話が出てたんだ。月乃ちゃんも一緒に成人式で会えたらいいねってさ。スマホないこともあって完全に音信不通だったわけだしさ」
自分がうじうじ隠れて生活している間にも向こうは時々自分を思い出して心配してくれていたことを知り、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
「やっぱりさ、女卓のメンバーが一人でも欠けた成人式なんて寂しいよ」
一人で成人式に臨むのは怖かったが、みんなと一緒なら怖くない。風向きが百八十度変わった気がした。
「うん。決めた。みんなと一緒に参加したい！」
ついに一歩踏み出した。
「やったー！」
乃愛は興奮のあまり大声を出してしまった。彼女は再び注目の的になり、恥ずかしそうにへこへこ周りに頭を下げた。

「今日は久しぶりに会えて本当によかったよ。ありがとう」
今朝集合したコンビニに着いたころにはすっかり暗くなっていた。
「こちらこそ。成人式でまた会おうね」
車を降りると、乃愛は手を振ってから歩いて行った。日は沈んでしまったが、明るい気持ちで一日を終えることができた。

家に帰ると桃花はすでに帰宅していた。食卓には依頼の報酬として受け取った干し柿が並べられ、両親が一つずつつまんで味わっていたところだった。
「おかえり。それより月乃、この干し柿うまいぞ」
父親がもう一つ手に取って彼女に見せびらかした。しかし、ケーキと飲み物でほどほどに腹が満たされていた月乃はすぐに飛びつかなかった。一回深呼吸をし、あの決意を口にすることにした。
「お父さんお母さん」
「どうしたの？」
干し柿を頬張るのをやめて月乃を見た。台所で手を洗っていた桃花も慌てて居間に戻って来た。何かを察したのかちょっと嬉しそうに口元を緩めていた。
「私やっぱり成人式に参加したい！」
突然の告白に両親は干し柿を落としそうになったものすぐに安堵の表情を浮かべた。
「それがあなたの望みなら構わないわ」
「中学までの同級生となんてこの先会えるかどうかも分からないんだから楽しんできなさい」
月乃の最終判断を快く受け入れた。
「やったねお姉ちゃん！」
桃花が感極まって飛びついてきた。
「何が『やったね』なんだ？」
父親が怪訝そうに聞いてきた。月乃の卓球部での過去も、選手の遺族や副部長に会ってきたこともすべて両親には内緒にしていたので無理はない。桃花がうっかり喜びを言葉にしたことで危うく明るみになるところだった。
「何でもないよ」
声をそろえて言った。小さい頃から両親に隠れて何かをするときにはいつも以上に団結力を発揮する姉妹であった。
その夜、月乃は机に向かい引き出しから便せんを取り出した。ブルーギルズの中学生たちに手紙を書く際に買ったものの余りである。吉村夫妻の宛名を書いたところでペンを止めた。
「そういえば住所が分からないや」
副部長への謝罪などが上手くいき彼らの助けが不要になりそうだったので、その報告をしようとしていたところだった。心の籠った直筆の手紙で感謝を伝えようとしたが生憎宛先が分からずにいた。
「本当は手紙がよかったんだけどな。仕方ない。ブログの方にアドレスが載ってた気がするからメールで送るか」
顧問らとの戦いを記し世間に知ってもらうためのサイトを開き、メールの送信画面にコピペした。遅い時間だったので下書きだけ保存して翌朝送ることにした。
「そうか。優陽ちゃんも本当は今度成人式に出るはずだったんだよな。振袖……あの子は何色が好きだったんだろうか？」

二十歳おめでとう。そう心の中で祝った。彼女の戦友たちは今何をしているのだろうか。部屋で一人思いを馳せた。優陽のことを覚えていて遺影でもいいから一緒に式に参加させてもらえるといいなと思った。

机の時計の日付が変わる。2016年も残すところあと数日。桃花たちとともにブルーギルズとして活動できる最後の年になろうとしていた。そして春になればまた環境が変わる。自分も含めメンバー全員が笑って引退を迎えられる年になってほしいと願った。

それから少しして成人式当日。予約した美容院でプロに見てもらい、月乃は母親が使った振袖に身を包んだ。白地に金色や黒色の柄があしらわれた手描き友禅はピンクや水色などポップな振袖にはない荘厳なオーラを漂わせていた。

「お姉ちゃん綺麗！」

着付けが終わって鏡の前に立っている月乃の横で、桃花の方がはしゃいでいる。そのさらに横で涼花があきれたように二人を見ていた。成人式は「成人の日」ではなく前日の日曜日だったため、この日二人は部活があるはずだった。しかし、月乃の晴れ舞台に立ち会いたくて仕方がなかったので「塾の特別講座がある」と嘘をついて休んでいた。二人の顧問は「学生は部活より勉強が優先」のスタンスをとっているので彼女たちの策略にまんまとひっかかってしまったようだ。

「綾音ちゃんたちはどうやって会場に来るんだっけ？」

振り返った月乃の髪の毛が光る。美容スタッフの粋な計らいで金箔が塗られているのだ。

「木ノ道支部と一緒にバスで近くまで来るみたい。駅からよさげな便が出てるのを綾音が発見したらしいよ」

鈴蔵中は浜塚市の中でも十数年前まで独立していた地域にあり、三人の中学がある中心地域から自転車で向かうには少々骨が折れる。

「さすが綾音ちゃんだね。私も普段バス使わないし、こんなところまで出てこられる便があったなんて知らなかった」

美容院のコンセプトに合わせたアンティーク調の壁時計は十二時半を指していた。式の開始は十三時半で受け付け開始は十三時から。ここから会場までは徒歩十分くらいなので、美容院をあとにするにはまだ少し時間に余裕がある。それまで立って待つのも疲れるので待合室のソファを借りて三人で休むことにした。月乃は和柄の小物入れからスマホを取りだし、乃愛から連絡が来ていないか確認することにした。途中で彼女と落ち合うことになっていた。読み通りホーム画面には「もう着付けが終わったので会場近くの児童公園を散歩している」という

旨の通知が表示されていた。二人はそこで合流することにした。

転ばぬよう慎重に歩みを進めていく月乃の両脇に張り付いて歩く桃花と涼花の目は、首の向きを変えるたびにギラリと光った。式の時間が着々と近づいているため、通りすがりの車の後部座席にちらほらと簪のついた頭が見つかる。今となっては乃愛という味方がいるものの公園に着くまで無防備なのには変わりない。そんなわけで道路の取り締まりをするプロの警察官の如く、車から月乃を睨みつける新成人がいないか確かめているのだ。

「まったく二人とも。そんなにガン見しまくってたら私になんか興味ない人の視線まで引き寄せちゃうじゃないか」

振袖よりも付き人である私服の未成年の方が目立っている異様な光景に、月乃は笑いを抑えきれなかった。

「でも、ありがとうね。みんながいなければ乃愛に会うこともできなかっただろうし、今日だって寂しい一日を過ごすことになってたかもしれないから」

赤信号で立ち止まる。ここを渡ったら約束の公園まではもうすぐだ。目の前の県道を鉄の塊が何台も通り過ぎていく。二人は相変わらず塊の中身に目を光らせていた。姉の晴れ舞台だというのに他のことに気をとられてじっくり振袖を見ることのできない妹を見て、帯のきつく巻かれた腹が更にしめつけられた。自分より他人の幸せを願って動く力を持っていることはすばらしい。でも、成人式だというのに義務教育すら終わっていない未成年に守ってもらっていていいのか？　信号は青に変わったが、そのまま歩みを進めることができずに俯く。

「お姉ちゃんどうしたの？」

ノーメイクなのにくりっと大きい桃花の瞳が月乃を見上げた。

「桃花、会場までの行き方は知ってるよね？　私はもう一人で平気だから、二人で綾音ちゃんたちを迎えに行ってあげて」

水晶玉のように澄んだ瞳を見つめ返すことなく指示した。この時の月乃の目は凛と細くなり今や幻となった英雄の威厳を放っていた。いつもと違った横顔の姉に桃花は少々ひるんでしまったが、狂気や冷酷さは感じられなかった。

「でも……」

黙って横断歩道を渡りだす。草履の音だけが力強くこだましている。桃花は慌てて追いかけようとしたが、何かに引っ張られ金縛りのように体が動かなくなった。その間にも月乃はどんどん遠ざかっていく。

「桃花、もういいんだよ」

手首を掴んでいたのは涼花だった。
「月乃さんはきっと大丈夫だと思う。また会場で会えるんだから、無事を信じて待とう」
「うん」
横断歩道を渡り切ったころには月乃はもうすっかり遠くに行ってしまった。こんなに歩くのは早かっただろうか？　車移動に慣れてせっかちになっているのか。それとも……小さくなっていく姉の背中はいつもより大きく堂々としているように感じられた。
「行こうか！　そろそろバス着いちゃうよ」
「ちょっと、桃花、急に走り出さないでよ！」
会場は鈴蔵中生にはなじみのある交流施設。公園に向かう途中で右に曲がって近道すればすぐにたどり着くことができる。
「ほら、綾音たちを待たせるわけにはいかないよ」
いつの間にか二人の腕は離れて、桃花は涼花を置いていく勢いで路地を突っ走っていた。そうはさせまいとスピードを上げる。学力も体力も桃花より一枚上手な涼花はなんとか桃花に並んだ。お互いに正面を見ながら走っていたはずなのに、桃花は急によそ見をした。自分とは逆側を見ているため、涼花はその表情を伺うことができなかった。青空が眩しいが空っ風がうなり声をあげている。肌に冷風が吹き付け乾燥する。桃花の目元には朝露のような水滴が光っていた。それから二人は何もしゃべらずに交流施設のバス停まで駆け続けた。

月乃はもう振り返らなかった。草履にも慣れてきて、弾む足音は加速していった。マテバシイの樹に囲まれ異世界感を放つ児童公園が近づいてくる。新成人にとっては特別な日曜日だが、この街の九割以上の人間にとっては普通の休日にすぎない。最近の子供たちはこたつでゲームをやる方が楽しいのか、公園に児童の気配はなかった。代わりに敷地の真ん中あたりに植えられた巨大な欅の木陰に美しい女性が佇んでいるのが見えた。カドミウムイエローの振袖は大木の薄暗がりの中でも一等星のような存在感を放っていた。風が吹き、袖が揺れている。ついこの間彼女に会っていたおかげで、今回はもう何のためらいもなく近づけそうだった。スマホを取りだし手帳型ケースに埋め込まれた鏡で髪飾りが乱れていないか確認してから、心を弾ませて公園へ入った。
「乃愛――！」
張り切りすぎて、まだ距離があるのに声を上げてしまった。乃愛は驚いて後ろに倒れそうになったが、なんとか月乃の方へ向き直った。
「やっほー！」
手を振りながら月乃の方へ歩み寄ってきた。遠くから

だと模様はぼやけた抽象画にしか見えなかったが、気づけば色とりどりの牡丹が浮かび上がっていた。
「わー！　月乃ちゃんの白い着物綺麗！　イメージにあってる」
彼女の瞳には星が見えた気がした。
「ありがとう。ちなみに狼と子犬どっちのイメージ？」
乃愛は左手で口元を隠しながら上品に笑う。
「凛としてるけど昔と違って冷徹さが抜けてる。狩りを忘れた動物園の狼だな」
「それもう犬と変わらん」
月乃も我慢できずに笑う。帯で圧迫された腹に力が入って痛む。
「それで他の子たちは着付け終わったの？」
「えっと、残りの三人は着付け会場が同じらしくて全員終わったらそろってここに来ることになってたはず。あ、もう公園の近くまで来てるみたい」
この前と比べて飾りマシマシな指でスマホを操作していた。
「ねえ、このまま迎えに行っちゃおうよ」
他のメンバーと何年も直接会っていないのは乃愛も同じだ。もう一分もじっとしていられないほど再会を待ちわびている様子だ。
「会いに行こう！」
二人は裾をなびかせながら公園をあとにした。
「美容室はこの通り沿いにあるから、あそこを左に曲がれば会えるはず」
急いで歩くと鼻緒が当たって足が痛む。それでもみんなに会えることが嬉しくてちっとも辛くはなかった。
「見て！」
先を歩いていた乃愛が指さす先に、三色の振袖が見えた。黒にピンクに赤、遠くからでも良く目立つ。向こうも二人の存在に気づいたようで、早歩きで近づいて来る。
「乃愛、月乃――！」
数年越しに目の前に現れた戦友の顔からも、卓球をしていた時の気迫は抜けきっていた。校則であれほど厳しく定められていた髪の毛は暗さを失い、顔から眼鏡が消えている者もいる。
「三人ともめっちゃかわいくなってる！　会場着いたら写真撮ろうね」
会場に向けて歩き始めた。何もしこりの残っていない乃愛は、数年ものブランクなど感じさせない勢いで話しかけている。自分の罪を許してくれているから再会できたのは知っているが、それに甘んじてのうのうと接していいのか分からずにいた。乃愛から一歩下がって四人の楽し気な様子を眺めていることしかできなかった。
「月乃、元気にしてた？　どこで何してるかも分からなかったから心配したんだよ」
三人のうち黒い振袖に身を包んだ梨佳が、月乃が居心

地悪そうにしているのに気づいて声をかけた。卓球部にいたころは後輩の面倒見がよく、誰からも好かれる先輩だった。
「隣の市の高校を卒業して、今は浜塚大学で教員目指して頑張ってるんだ」
　同級生の指導もまともにできなかった自分が教員志望だなんて打ち明けてよかったのか？　迷いがあったものの嘘がつけなかった。
「先生になるのかあ」
　梨佳は意外性に感心しただけだった。でも彼女らに対して後ろめたい思いがある月乃は、そのつぶやきに「は、なんでコイツが？　生徒かわいそう」という訳が当てられている気がして仕方がなかった。
「こんな私が先生になろうだなんておかしいよね」
　顔が熱くなり、声を絞り出した口元がピクピクと動き始めた。自虐してやりすごそうと考えた。
「そんなことないよ」
　ピンクの振袖を来た雫がはっきりと言った。
「個人的な意見なんだけど、いじめを見て見ぬふりしたり贔屓するような悪い先生って、自分が学生だった頃に人間関係で失敗したことがない人ばかりな気がするんだよね。月乃はそんなやつらとは真逆だしむしろ神教師になれると思う！」
　雫は月乃の指導に病んで不登校になった過去を持っている。
「私が不登校になった決定打はね、実は月乃ちゃんじゃなくて担任だったんだ」
「嘘……」
　初耳だった。
「月乃の行き過ぎたやりかたは訴えさせてもらったけど、部長のやりかたについていけないお前の実力不足だとか言われちゃって。それで私、ああ、この学校に味方はいないんだって諦めちゃったの。ちゃんと先生が動いてくれたら結果的に月乃だってすぐに行動改められて何年も苦しい思いしなくて済んだかもしれないのに。ホント嫌な担任だった」
　自分が小さい頃に親や習い事の先生に言われ続けてきた言葉に似ていた。でも一人っ子で親から大切に大切に可愛がられて育ってきた雫は中学生になるまで厳しい競争の世界を経験したことがない。免疫がなくたった一言でも致命傷になってしまったに違いない。
「失敗こそ宝物なんだよ。成功ばかりじゃ人は強くなれないし人の痛みも知れないから」
　雫は念を押した。弱き者を守り、悪に立ち向かう。自分はなんだかどこかの二人に似ている気がした。守られてばかりじゃなくて、学んだこともたくさんあった。
「まあ何より、月乃が普通に学校に通って、普通の大人になってて安心したよ」

赤い振袖の朱里が言った。彼女はあまり目立つ方の性格ではないが、いわゆる縁の下の力持ちな存在だった。
「私、月乃はこの先どんな風になっちゃうんだろうなって心配してたの。夜になっても家に帰らないで、未成年のうちから酒とかたばことかやる子になってないかなって。あと髪も金髪にしたりさ」
朱里の言葉に、他のメンバーもそろって頷き笑っていた。
「それな。卓球が思うようにいかなかったこともあったと思うけど、それ以前にいい子でいることに疲れちゃったのかなとか、家で何かあったのかなとかそっち系の心配もあったんだよ」
梨佳も自分の思いをさらけ出した。
「逆に部活以外で問題起こしてなくてよかったよ」
朱里も付け加えた。
「朱里の言う通りだよ。ポジティブポジティブ」
いちばん苦しい思いをしてきたはずの雫が月乃の肩を優しく叩いた。
「ほら、着いたよ！」
長々と話しているうちに施設が見えてきた。建物の手前にある駐車場の車の隙間から、時々スーツ姿や振袖姿の新成人が顔をのぞかせていた。中には車を乗り合わせてきたグループもあるようだ。
「よーし月乃。みんなで入れば怖くない！」

五人の集団で突撃したら目立つかと思ったが、まわりも振袖だらけなのですっかり溶け込んでしまった。
「受付が済んだらそのまま奥のホールまで行けばいいんだよね？」
雫が聞いた。
「そうだったと思う。みんな揃ってるわけだしもう入っちゃうか」
乃愛が先頭に躍り出た。強さだけで部長になった月乃より、副部長の方が行動力がある。乃愛には敵わないと思うことは当時も多々あった。
入口の方へ向かっていると三人と無事合流できた桃花たちが待っていたようで、飛び跳ねながら呼びかけているのに気づいた。
「あの子ってもしかして月乃の妹ちゃんだっけ？　今は中学生くらい？」
子供好きな梨佳は昔桃花が大会を見に来た時に遊んであげていたこともあってよく覚えている様子だった。
「今中学二年生なんだよ。早いよねー」
ついこの間まで小学一年生だと思ったら来年高校受験。そりゃあ自分も成人しているわけである。
「こんにちは」
月乃が仲間と打ち解けている様子を見て安心したのか、桃花たち五人は臆することなく挨拶をした。
「えっと、他の子たちは妹ちゃんのお友達？」

桃花が仲間を連れてくるにしろ五人ではギャラリーが多すぎるため不審に思っている様子だった。そこで涼花たちの方から名前や学校名を紹介し、ブルーギルズでの活動も説明した。
「えーすごい！　もう月乃がやってること顧問と変わらないじゃん」
「妹ちゃんたちのやりたいこと応援してあげてるとかめっちゃいいお姉ちゃんじゃん」
「みんなのキラキラした目を見ると月乃のこと信頼してるんだなってのがすごい伝わってくるー」
　褒めちぎられて月乃も中学生五人も照れてしまい、なんだか逃げ出したくなってしまった。
「この子たちみんな卓球部なんでしょ？　そうだ！　成人式終わったらみんなで卓球しに行かない？　うちら対現役勢で団体戦やろうよ」
　乃愛が提案した。それを聞いた桃花たちはエサに群がる鯉のように喜びの舞を披露した。
「はい。先輩方と試合してみたいです」
　涼花なんて、もう今すぐにでも戦いたそうにしている。その証拠に心なしか脚を広げて前傾姿勢になっている。
「そういえば私、まだお姉ちゃんと試合したことないや」
　桃花は目から闘魂とともに飛びだすビームを月乃に向かって発射させた。目は口ほどにものを言うとはこのことだ。
「いいよ。現役じゃないからって遠慮なんかしないで生成堂々とぶつかってこい！」
　透明なビームとビームがぶつかりあって、今にも青い火花が見えてきそうである。
「そうだったんだ。じゃあオーダーも月乃と妹ちゃんが当たるようにしなきゃね」
　朱里も乃愛の提案に乗り気の様子だった。振袖なのに軽く体操を始めていた。
「朱里ったら試合は式が終わった後だよ。はりきりすぎ」
　月乃が落ち着きのない朱里をがっしり押さえつけた。和気あいあいとしたやりとりに笑いが起こった。

　式では市長からありがたいお言葉をもらったり、中学での思い出が詰まったスライドショーが放映されて盛り上がった。女卓の写真もいくつか映された。集合写真には月乃が映っていたのだが、ほとんどの人間は黙って干渉していた。しかし、前の席からヒソヒソと話し声がした。スーツの男二人組である。耳を澄ますとどうも雫が不登校になった話をしているようだ。一気に鼓動が速まり片頭痛の予兆を感じたが、すかさず雫が咳ばらいをしてみせた。二人は不快そうに彼女の方を振り返ったが、月乃や雫をはじめ女卓のメンバーがそろっているのに気

づくと血相を変えて首を引っ込めた。この時、乃愛も般若のように二人を睨みつけていたので、月乃は思わず笑ってしまいそうになった。式が終わった後、中学生たちも入れて写真を撮った。そして、着替えのために一回帰宅した後で、卓球ができる商業施設に行くことになった。

さて、現役卓球部員対引退勢の試合結果はどうなったかって？　五対五の団体シングル戦をやったんだけど結果は中学生たちの快勝だった。でも、やっぱり月乃は強かった。他の新成人が中学生に０-３で敗れた中、フルセットまで粘った。両チームの選手が瞬きも忘れかけて春山姉妹の一騎打ちを見守っていた。桃花がリードを広げたと思ったら月乃が怒涛の追い上げを見せた最終セット。桃花が十点でマッチポイント、月乃は九点の局面。荒い息。肩を上下させながら、桃花は手のひらに球を置いた。絶対にここで決めて見せる。一旦サーブの構えを崩して天井を仰ぐ。そして深呼吸をした。お姉ちゃん行くよ！桃花は心の中でそう呼びかけた。

「桃花、好きなサーブでかかってこい」

月乃も久しぶりに力を解放して消耗しているのか、前傾姿勢に構えた体はふらついていた。それでもなお手負いの獣のように桃花を真っ直ぐ捉えていた。

桃花にもう迷いはなかった。この技で決める。球を高く投げ上げ渾身の下回転サーブを月乃のへそめがけて打ち込んだ。台の中央に引かれた白線の上をなぞるように進んでいく球。チェーンソーの刃でもついているのかと疑うような鋭い回転音を放ちながら迫って来る球に反応が遅れた。やはり昔に比べて瞬発力も持久力も鈍っていた。なんとか跳ね返した白球はゆるやかに天井へ向けて昇っていく。

「桃花、打て！」

自身の敗北を悟った月乃は、最後の力を振り絞って目の前の敵を鼓舞した。桃花の鼓膜が震える。打ち上げられた球はコマ送りのように自分の腕の届く高さまで落ちてきた。心が騒ぐ。かつて勝利に固着しあらゆるものを犠牲にしてきた月乃に止めを刺すのは残酷に思えてきた。視界がぼやける。自分の涙もろさを憎んだ。

「今だ！」

月乃はなおも叫んだ。我に返る。自分はお姉ちゃんが大好きだ。だからこそ……汗のにじむ手でしっかりとラケットの柄に力を込め、叩きつけるように一撃を繰り出した。その速さに矢と化した球は、コートでワンバウンドした後、月乃の心臓に直撃してはじけ飛んだ。そして球は床に転がり落ちた。月乃は痺れる左胸を抑えながら、膝から崩れ落ちるようにして台に倒れこんだ。

「お姉ちゃん大丈夫？」

ラケットを台に放り出して駆け付けた。桃花自身も体力が削られていたが、小柄な体で姉に肩を貸そうと試みた。
「おめでとう。私は大丈夫だよ。ありがとうね」
痛みが引いてきたのか、ゆっくりと立ち上がった。
「あんなに小さくて泣き虫だったのに立派になったね」
汗でちょっと湿っぽい手で頭をなでてくれた。そして、思い切り抱きしめられた。ブルーギルズの仲間たちも戦友たちも拍手をした。いつもとは順番が逆になってしまったが、姉という依頼人のお悩み解決と試合が終わり肩の荷が下りた。帰りの車ではぐっすり眠ってしまい、月乃に背負われて車から降りた。
「ほら、桃花起きろ」
両手がふさがっていては玄関の鍵が開けられないため、上下に揺すって目覚めさせた。
「うーん。もう着いたの？」
すっかり電池切れで目はタヌキのようにたるんでいる。背中から降ろされても地に足がついてるのか怪しかった。
「おつかれさま。そして、こんなお姉ちゃんのためにがんばってくれてありがとうね」
姉の仲間たちと過ごした一日はお腹が空いていても平気なくらい楽しかったので、月乃が五年ものあいだ葛藤し続けていたのも忘れていた。
「そんなことないよ。あの時乃愛さんに会いにいったのもお姉ちゃんの意思でしょ？　私たちはただの脇役で、一番頑張ったのは間違いなくお姉ちゃんだよ」
月乃は鍵を開けて中に入った。リビングから揚げたてのからあげのにおいがする。両親も愛しい二人の娘の帰宅を心待ちにしていた。試練の一日が終わろうとしていた。

三連休が明け桃花も月乃もそれぞれの場所で仲間と過ごしていた。
「えーでは三年次教育実習のガイダンスを始めたいと思います」
大学の講堂は桃花たちのいる中学とは違って思い思いの色の服を着た学生たちでごったがえしている。けれど、みんな月乃と同じ教育学部の仲間たち。みな成人式を終えたせいか、話を聞く背中はいつになく伸びている。普段講義を受けるときには猫背になったり脚を組んでいるのに。中には進んでメモをとっている者もいた。
「教育実習、大変だろうけど楽しみになって来た！」
ガイダンスから解放された後どのグループも同じ話題で盛り上がっていた。藍もまたその一人だった。
「自分がどんな教員になりたいか目標を見つける機会にしてほしいって言ってたけど、どうしようかな？」

机の上で資料をそろえながら悠海が言う。
「ねえ、月乃は目標ってもう決まってたりする？」
「言っていい？」
突然焦らしてきたので藍も悠海も不思議に思って彼女に注目した。
「あのね、今まで二人には隠してたんだけど私ってね……」
目を輝かせて思いを語る月乃の姿は、数か月前とは別人だった。月乃には教員になったらどうしてもやってみたいことがあった。
「すごくいいと思う！」
「月乃にしかできないよきっと！」
一体何を伝えたのか。藍も悠海の目にも月乃と同じ輝きが溢れていた。

それから時は過ぎ2020年代に突入し元号も変わった。あの日やりたいことを語った月乃は無事に教員になることができ、数年の勤務を経てスキルを高めていた。そして去年、目標達成に大きく近づく出来事が起きた。二校目となる中学校に異動したとき、女子卓球部の副顧問を任されたのである。顧問は接しやすい人で、良く働く月乃のことを信頼し、意見に耳を傾けてくれた。いい出会いに恵まれ、今日ついに運命の日が訪れたのである。
顧問と二年生の部員が空き教室の椅子に着席し、春山先生の到着を待っていた。まだ先輩の支配下にいるとはいえ、たった数か月後には一年生をリードし同期と協力して組織を作り上げていく子どもたちだ。机のわきに置かれた通学鞄やエナメルバッグもまだ艶を残していた。
「みなさんお静かに。今日は春山先生から君たちに大切なお話があるそうです。みなさんのこれからのことを想って一生懸命に考えてくださったのでしっかりと聞きましょう」
教室のドアの向こうで顧問がはきはきと指示をしているのが聞こえた。素直な子たちで、直前までおしゃべりしていたのに急にシャンと前を向いた。
「あれ？　先生準備はできましたかー？」
ドアのガラスから月乃の姿が見えたので、わざと砕けた口調で月乃を呼んだ。緊張をほぐしてあげようとする顧問の粋な計らいだ。
「はい。大丈夫です！」
ガラスの向こうで大きな丸を作って見せた。そして、かわいい教え子の待つ教室へ足を踏み入れた。早速気配りが得意な子がサクラになり、拍手が巻き起こった。まだ何もしてないんだけどなと思いつつも、「ありがとう」と言ってから教壇に着いた。そしてチョークを取り、題目を書いていく。白い粉がパラパラと落ちていく。月乃

の手の動きまで子どもたちは真剣に目で追っていた。
「はい。今日みなさんにお話しするのはこちら」
　書いた文字が見えるように横に逸れた。大きく丁寧な筆跡で「二年生になるキミたちへ　みんなを幸せにできる部員になるために」と記してある。
「みなさんはチームメイトのことが大好きですか？　一緒に練習を頑張ったり、応援されると嬉しいですよね。でも先生はみなさんと同じ中学生だった頃、卓球を通してたくさんの人を傷つけてしまいました」
　ストレートな告白に生徒たちはみな眉をしかめた。開幕早々重い空気に包まれる教室。しかし、春山先生は笑顔で続ける。
「まあ今となっては仲直りもしたし、チームメイトともたまに顔合わせたりしてるんで安心してください。でもかわいい君たちには大人になるまでずっと辛い思いをしてほしくないから、今日この場を設けて周りの人たちを幸せにする方法を教えようと思いました」
　それから、自分自身の生い立ちやブルーギルズでの活動、妹たちのことなどを話した。生徒たちはいつの間にか姿勢が前のめりになっていった。月乃の不思議で波乱万丈な卓球人生にすっかり心を奪われている様子だった。最後には盛大な拍手が起こった。そして、代表の生徒が感想を熱心に語ってくれた。中学生ぐらいになるとだるそうにして先生の話聞かない子が増えがちだが、自分の伝えたかったことが心に響いてくれたことを知ってうれしくなった。卓球に助けられ、卓球に狂わされたここまでの人生。けれど、こうして自分が本当に輝ける場所へたどり着けた。当時の自分と同じ年頃の生徒を愛し愛される日々。それだけで満たされなかった子供の頃の自分の心に潤いがもたらされていく気がした。ミニ講演会が終わって元気よく教室をあとにする背中を見ながら、彼女たちのこの先の幸せを願うのであった。

月下の孤高狼編　完